



第3の柱

人生の「セーフティネット」

趣味やボランティアなど仕事や家庭以外の「第3の柱」を持ち、友人を大切にしよう。それこそが、仕事や私生活に好循環をもたらし、人生をより豊かにしてくれる。

丸井に勤務する平岩国泰さん(34歳)は、会社の名刺のほかに、もう1つの名刺を持つ。

会社員としての仕事の傍ら、2004年から子供たちの放課後を豊かにする活動に取り組んでいる。大学時代の友人と2人で「放課後NPOアフタースクール」を立ち上げた。

放課後の学校や公民館で、地域の大人たちが「市民先生」となり、子供たちに「課外授業」をする。これまでプログラムに参加した子供は、累計3000人以上だ。

料理、お菓子作り、農業、家作り、編み物、スポーツ、ダンス、音楽、茶道、理科実験、模擬裁判……。このページの写真で紹介しているようなプログラムをコーディネートするのが平岩さんの役割だ。「すべての大人は市民先生になれる」と平岩さんは語る。

平岩さんがこの活動を始めた理由は3つある。

「ライフワークを持ちたい」

1つ目は、2004年に長女が生まれたことだ。親となったことで、子供による殺人事件、いじめ、学級崩壊、ニート問題などに敏感になり、「子供の世界は一体どうなっている?」という危機感を強く抱くようになった。

2つ目は、当時、丸井で人事採用の仕事をしていたことだ。1000人ぐらいの大学生を面接しながら、若者に覇気がないことが気になっていた。就職面接の場で、将来について学生から相談されることも多かった。

3つ目は、30歳になって、自分が何を目標として生きていくのかを真剣に考えたことだ。仕事と家庭だけではない第3の柱として、「ラ

イフワーク」と言えるものを持ちたいと思うようになった。

米国で1990年代後半に広がった「放課後NPO」という活動を知り、「自分が持っていた、いろいろな問題意識が一つの串に通ったような気がした」(平岩さん)。

「仕事、家庭以外の「第3の柱」を持つことで、安定感が得られ、より自分らしくいられるようになった」という。

「第3の柱」のメリット

平岩さんの例に限らず、趣味やボランティア、地域活動などの「第3の柱」は人生で直面するリスクをヘッジしてくれる。例えば、定年退職後は会社名や役職は関係なくなる。また、今は「父」や「母」として子育てに忙しくても、子供はやがて親の手を離れる。役割や義務がなくなると、やりたいことも

思い浮かばず、毎日ほっと過ごすしかないというリスクを、ビジネスパーソンなら誰しも抱えているのだ。

「第3の柱」があることで、若いうちから、会社や役職、役割を離れ、他人と接したり、自分と向き合ったりする時間を持てる。そんな時間を「仕事に関係ないから無意味」と考えるのではなく、「楽しい」と感じられるようになれば、人生はより豊かなものになる。

また、仕事と家庭の2本柱では、どちらかの調子が悪いと、もう片方にも悪影響が出やすい。3本柱であれば、「柱の1つは調子が悪くても、あとの2つはそれなりだから、まあいいか」と精神のゆとりを持ちやすい。実際、平岩さんは、放課後NPOを始めたことで「仕事や生活にも良い影響が出ている」と話す。

会社の仕事で人に会った時、自分が放課後NPOの活動をしていることを、平岩さんは積極的に話す。相手が「市民先生になりたい」と言ってくれるかもしれないし、そうはならなくても、自分という人間をより深く知ってもらうこと

は、仕事上の人間関係を構築するうえでも、きつと役に立つと考えるからだ。

Win・Winを超える関係

「オンとオフの切り替えと言われるが、人間はそんなに単純ではない。仕事とプライベートを区分けするから、人脈作りがおかしくなるのではないか。」「成功しちゃう」「人脈」はじつは公私混同ばかり」(Nanaブックス)の著者、夏川賀史さんはこんな問題提起をする。「その合わない人とうまくつき合うノウハウばかりがもてはやされるが、人生で本当に大切なのは、気の合う人と長くつき合う方法だ」と夏川さんは話す。

長く続くつき合いには、いくつかが共通点がある。

まず、つき合う目的や互いの利害関係が重視されていない。何となく会ってムダ話にふけったり、どちらかが一方的に世話になっていくという関係が多く、いわゆる「Win・Winの関係」を超えたものになっている。

次に、知り合った時の目的とは違う要素がきっかけで、深い友人



- 人生にセーフティネットを張り、リスクを避ける6カ条
- 1 仕事と私生活のほかに、趣味など「第3の柱」を持つ
 - 2 「ライフワーク」と呼べるように第3の柱に力を注ぐ
 - 3 第3の柱を持っていることを、仕事先などで公言する
 - 4 目的や互いの利害関係を超えた友人を作る
 - 5 公私混同でつき合える仕事の関係者を作る
 - 6 大切な友人が困っていたら、親身に手を差し伸べる